

# 守破離 (しゅはり)

は、日本での茶道、武道、芸術等における師弟関係のあり方の一つです。日本においてこれらの文化が発展、進化してきた創造的な過程のベースとなっている思想でもあります。

まずは師匠を模範として型の伝承を受け「守る」ことから修行が始まります。次に、その型に自分本来の強みを加え、伝承された型をより良く変化させていく「型破り」へと発展させます。その変化を繰り返すことで、最後には伝承された本来の型からも解放された「離れ」になり新たな型を流派として立ち上げたのち、それをまた新たな「守り」へと継承していきます。

これらは単に強化・成長するだけでなく「変化」し続けることで、途絶える事のない進化を継承していく根源となります。

この考え方をITサービスマネジメントに照らし合わせたものが下の表です。「守：今何をすべきか」、「破：今後何が必要とされるか」、「離：将来どうなるのか」という変化を表しました。ただし、ここでいう守というものは本来「模範」となるべきITサービスの原点なのですが、それを体現するに至るまでの実践の過程は容易なことではありません。日本では開発と運用が組織的に分離していることが多く、ITサービスを創出して提供し続けるというライフサイクルを通じたマネジメントが実現しにくい状況が続いてきたからです。

これらの背景を加味して、「守」を二つの状態に大分しました。「破」や「離」に向かうには「守」による型の体得が必達です。つまり、今まさに模範の姿への到達のために、ITIL®の活用枠拡大に向けたITSMの原点回帰が求められています。手段の一つとしてDevOpsなどによるカルチャーチェンジはその第一歩であると位置づけられます。

	方向性	ITIL®の活用					ITSMの状態
		SS	SO	SI	SO	CSI	
守	システム起点で効率化と安定稼働 (主にSoR)	-	-	△	◎	△	<ul style="list-style-type: none"> <li>システム運用管理(特にインフラ管理)が中心で、ITIL®は開発者(Dev)には意識されず、サービストランジションの活用はITサービス導入や刷新の際の運用者(Ops)の受け入れ判定に留まる。</li> <li>CSIの範囲は運用作業/プロセスの改善や自動化、効率化が中心で、業務視点 (ITサービス視点) には至らない。</li> </ul>
	TCO最適をベースに効率化と安定稼働 (主にSoR)	-	○	○	◎	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>開発者(Dev)と運用者(Ops)が連帯感をもって、サービスデザインとサービストランジションが強化された状態。</li> <li>本来のSI (システムインテグレーション) への原点回帰がなされ、ITサービスの適正化が目指されている模範となる状態。</li> <li>CSIの範囲は業務視点 (ITサービス視点) に向上し、システム改善への誘導が生まれ運用コストが低減していく。その結果としてTCO最適が進んでいく。</li> </ul>
破	ビジネス起点で新たな価値を創造 (主にSoE)	○	◎	○	△	◎	<ul style="list-style-type: none"> <li>より良いITサービスを提供するためにシステムのライフサイクルを通じてITSMが機能する。それには開発者(Dev)と運用者(Ops)のシナジーに加えて企画者(Biz)の関与が必達。</li> <li>「モノとコト」をSoEで直結させる「ものづくり」の成熟によるデジタルフロントサービスをITSMの柱として立脚させていく。(ITSMのウェイトの上流シフトが巻き起こっていく)</li> <li>パイモーダルの考えからITSMは画一的なものではなくなる。モード1でもモード2でも上流工程が成熟することで、システム運用作業が極小化し、結果として運用管理が軽量化される。</li> </ul>
離	利用者視点で市場のサービスを組み合わせる価値を創造	◎	○	△	-	◎	<ul style="list-style-type: none"> <li>ITサービスには企画者(Biz)と利用者(EU)が中心となった世界観。システムエンジニアリングの要素はサービスに完全に内包される。</li> <li>個別SIの需要は減少し、既存サービスやパッケージの組み合わせで目的のサービスが実現される。(ものをつぐらない)</li> <li>人手でしかできない部分は残存し、ITSMにおいてはサービス戦略とホスピタリティがメインの需要となる。(形式知にできないタスク)</li> </ul>